

幼児期・児童期における他者理解の発達過程 - 性格特性の推論の発達を中心に -

Children's understanding of others: The developmental process of personality trait inferences

プロジェクト代表者：清水 由紀（教育学部・准教授）

Yuki SHIMIZU (Associate Professor, Faculty of Education)

1. 問題と目的

子どもは、園や学校での集団場面において、対人葛藤場面を日々経験する。対人葛藤は、自己と他者の要求の食い違いから生じるため、これを解決するためには相互の要求を調節することが必要となる。幼児や児童は、対人葛藤場面においてどのように振舞うのだろうか。Hartup, Laursen, Stewart, & Eastenson (1988)は、対人葛藤場面における子ども同士の相互作用について観察調査により検討している。保育園に通う4歳児53名を10週間にわたり観察した結果、親しい友達同士の間で生じた葛藤は、友達関係ではない子ども同士の間で生じた葛藤よりも頻度が少なく、解決までの時間が短く、対等な結果で解決されることが多いことが明らかになった。しかし、先行研究では子ども自身の解決方略の使用のみが調べられており、他者の解決方略の使用の予測については検討されていない。幼児期から他者の性格特性を推論することが可能であることから(e.g., 清水, 2000; 清水, 2005), 幼児でも他者の性格特性に応じて、その人が用いる対人葛藤方略を予測することが可能であると考えられる。そこで本研究では、自己と他者の要求が食い違う仮設の対人葛藤場面を設定し、幼児や児童が他者の解決方略の使用を予測できるかどうか、特に他者の性格特性に応じて予測できるかどうかについて実験的検討を行う。

2. 方法

(1)対象児：埼玉県内の保育所の年長児クラス21名(男児6名、女児15名；平均年齢6歳3ヵ月)、および学童クラブの2年生19名(男児7名、女児12名；平均年齢8歳5ヵ月)。

(2)手続き：園内および学童クラブ内の一室に机と椅子を設置し、実験者と対象児が向かい合う形で個別面接により実施した。対象児の回答は実験者が記録用紙に記入するとともにICレコーダーにより録音を行った。

主人公であるやさしい子(あるいはいじわるな子)が好きな遊びをしているところに、友達がやってきて主人公の嫌いな遊びを提案する」という対人葛藤場面を設定し、表情予測課題、方略選択課題の2つの課題を行った。質問は条件(やさしい子、いじわるな子)ごとに繰り返した。

表情予測課題 架空の人物(やさしい子/いじわるな子)が主人公となる対人葛藤場面の描かれた絵を見せながら、「ある日、ちゃん(架空のやさしい子/意地悪な人物の名前)が××遊び(架空の人物が好きな遊びの名前)をしていたら、お友達がやってきて遊び(架空の人物が嫌いな遊びの名前)をしようといいました」と話したのち、ポジティブ表情(ニコニコ顔)とネガティブ表情(シクシク顔)が描かれた2枚の絵カードを呈示して主人公(架空の人物)がどちらの表情になるかを選択させた。

方略選択課題 他者の表情の予測課題と同一の場面において架空の人物がどのような方略をとるかについて質問を行った。自己中心の方略(相手の提案した遊びを受け入れず、無視して、自分の好きな遊びを続ける)、無条件受容方略(自分の遊びをやめて、相手の提案した遊びを無条件に受け入れる)、協調的解決方略(自己優先)(自分の好きな遊びを先に行い、その次に相手の提案した遊びを行うもの)、協調的解決方略(相手優先)(相手の提案した遊びを先に行い、その次に自分の好きな遊びを行うもの)、言語的解決方略(相手と相談して、自分の好きな遊びを行うか、相手の提案した遊びを行うかを決めるもの)の5方略が描かれた絵カードを呈示し、主人公が最も用いると思う方略を1つ選択させた。

3. 結果

表情予測課題 ポジティブ表情とネガティブ表情を選択した人数を Table 1 に示す。各表情を選択した人数について、学年ごとに、他者の性格特性(2)×表情(2)の χ^2 検定を行った結果、いずれの学年においても有意であった(幼児 $\chi^2(1)=22.24, p<.01$, 2 年生 $\chi^2(1)=13.57, p<.01$)。幼児と 2 年生のいずれも、自分の欲求とは異なる要求を他者からされたときに、やさしい子は、ポジティブ表情をし、いじわるな子はネガティブ表情をすると予測することが示された。

Table 1 表情予測課題の結果

	やさしい子		意地悪な子	
	ポジティブ表情	ネガティブ表情	ポジティブ表情	ネガティブ表情
幼児	16	5	1	20
2 年生	10	9	0	19

方略選択課題 各方略を選択した人数について、学年ごとに、他者の性格特性(2)×方略(5)の χ^2 検定を行った結果、いずれの学年においても有意であった(幼児 $\chi^2(4)=9.48, p<.05$, 2 年生 $\chi^2(4)=19.47, p<.01$)。残差分析の結果、幼児と 2 年生のいずれにおいても、やさしい子は「無条件受容方略」が多く「自己中心的方法」が少なく、いじわるな子は「自己中心的方法」が多く「無条件受容方略」が少なかった。幼児と 2 年生のいずれも、他者の性格特性に応じて異なる方略使用を予測するが、その傾向は 2 年生において大きかった(Figure 1, Figure 2)。

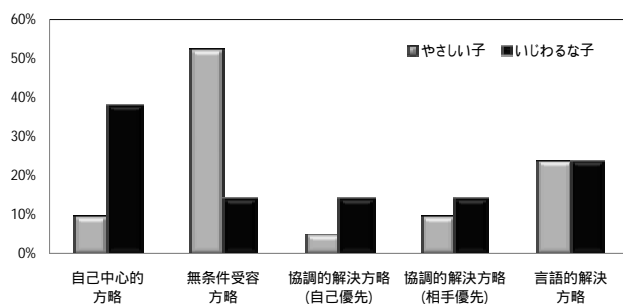


Figure 1 幼児における他者の対人葛藤方略の予測

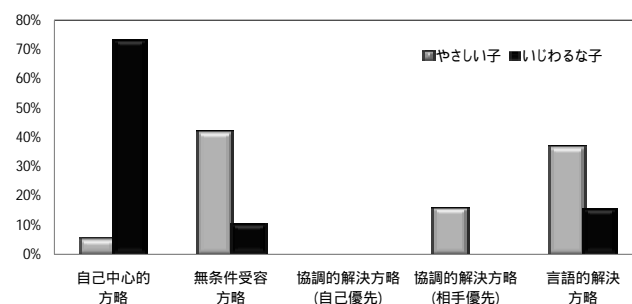


Figure 2 2年生における他者の対人葛藤方略の予測

4. 考察

本研究より、幼児と児童は、他者の性格特性に応じて他者の感情表出や方略選択の予測を行うことが示された。特に幼児は、やさしい子は無条件に相手の要求を受け入れ、いじわるな子は全く相手の要求を受け入れない、というような極端な予測をすることが示された。今後は、より年少および年長の子どもも対象とし、社会的な経験を積むにつれて、どのように対人葛藤方略の使用および他者の方略使用の予測が発達していくのかについて検討を行う必要がある。

5. 参考文献

- Hartup, W.W., Laursen, B., Stewart, M.I., & Eastenson, A. (1988) Conflict and the friendship relations of young children. *Child Development*, 59, 1590-1600.
- 清水由紀(2000) 幼児における特性推論の発達 - 特性・動機・行動の因果関係の理解 -. *教育心理学研究* 48, 255-266.
- 清水由紀(2005) パーソナリティ特性推論の発達過程 - 幼児期・児童期を中心とした他者理解の発達モデル -. 東京：風間書房.